



中国図像学という迷宮

佐々木 睦 (東京都立大学人文学部・助教授)

本COEプロジェクトに共同研究員として参加させていただき、『生活絵引き』の東アジア版を作る作業に着手したところである。僕の担当は中国なのだが、中国の絵画資料を見ては、中国人にとって「観察」とは？「写実」とは？という問題と向き合い苦悩している。それは絵画そのものの持つ欺瞞性に加えて、中国絵画の特殊性にもよるところがある。例えば宮廷に貴族と鹿がいる絵、いかに写実的に描かれていても騙されてはいけない。これは「鹿」が福祿寿の「祿」と音が通じるめでたい動物であるから描かれているにすぎず、決してその場面を観察して描かれたものではないのだ。僕はこういう図像を見ては感動のあまりめまいを起こす。最近の調査においてもそういう目のくらむ体験を経験している。

2003年の12月に広東省広州市・仏山市、ならびに香港を訪れ、祠廟とその周辺の図像調査をする機会にめぐまれた。調査は以下のような日程で行った。

日 時	調査地点	場 所	備 考
1 12 / 26	仁威古廟	広州市	北帝を祀る
2 12 / 26	陳氏書院(陳家祠)	広州市	陳氏一族の宗祠・子弟教育所
3 12 / 27	祖廟	仏山市	北帝を祀る
4 12 / 27	三元里古廟	広州市	北帝を祀る
5 12 / 28	北帝廟	香港・元朗	
6 12 / 29	北帝廟	香港・長洲	
7 12 / 29	北帝廟	香港・赤柱	
8 12 / 29	北帝廟(玉虚宮)	香港・灣仔	

広州の陳氏書院(陳家祠とも呼ぶ)は清の光緒二十年というから1894年の創建である。広東省の陳氏の宗祠であるとともに、一族の子弟教育の役割を担ってきた。現在は一般に開放され、広東民間工芸博物館を兼ねており、建物全体が全国重点文物保護單位に指定されている。門をくぐり、一目見て驚かされるのは、その過剰なまでの建築装飾である。建物の屋根から梁から棟木から柱や欄干にいたるまで、一面が精巧な陶像や塑像、石刻、木彫で埋め尽くされている(図1)。ここは広東の装飾芸術の粋を集大成した殿堂でもある。

彫られている図像としては吉祥のシンボルである動植

物、神々や歴代の皇帝、将軍に賢者、だまし絵に『三国志演義』や『封神演義』の一場面等々、それぞれに深い意味がこめられており、建物全体がまるでイメージとシンボルの百科事典のようである(図2「桃園の誓い」の場面)。ここは一日中いや一年中見ても飽きないだろう。胸おどる物語や幸福の象徴に囲まれ、陳一族の子弟たちはさぞや豊かな少年時代を過ごしたに違いない。

今回の調査では北帝廟を中心に回った。北帝はその名に似合わず、現在主として南方で信仰されている神で、明代の通俗小説では主人公として妖怪退治をしたりもする。広州・三元里の北帝廟はアヘン戦争時期に地元の農民によって組織された義勇団の本部が置かれた場所であり、廟の傍らには当時をしのばせる砲台が据えられている。現在では三元里抗英闘争記念館としても使用され、広州市の「愛国主義教育基地」にも指定されている。僕が訪れた日、大砲の周りでは子供たちが遊び回り、砲身をのぞき込むとゴミがつまっていた。

注目すべきは敷地の傍らに放置されていた、やはり当時のものと思われる石造りの獅子で、その台座の部分には西洋人が彫られていた(図3)。中国や日本の仏像の台座にも異形の姿をもつ人物や怪物が仏像に踏みつけられたり支えていたりするポーズで彫られる例が多々ある。これは邪鬼や羅刹だと説明されるが、いずれにせよ邪悪な存在が演じる役割だ。それを当時広東で略奪を暴行をほしいままにしたイギリス人に負わせている発想は、あっぱれとしか言うほかない。

もっとも中国語では「鬼」は「幽霊、化け物」の他に「外人」の別称として使われるから、邪鬼には違いないが。これと同じ発想のものは広州市の隣、仏山市の祖廟にもあった。やはりアヘン戦争時期のものである(図4)。

宿の近所に祭具を取り扱う問屋があったので、ふらっとのぞいてみた。春節(旧正月)が近いせいか、店内は新年を祝う吉祥グッズであふれかえっていた。なかでも財神グッズは富をもたらすありがたい存在としてかかせないアイテムである。財神はふつう旧時の文官のいで立

ちをした壮年の男の姿で描かれ、やはりめでたいとされるぶくぶく太った子供がその役割を演じている場合もある。その中に奇妙な財神がいた。ここ何年か中国や香港で目にする度に気にはなっていたものである。なんとスヌーピーやキティちゃん、ミッキーマウスにくまのプーさんなどの人気キャラクターが財神に扮しているのである(図5、図6)。

僕らもクリスマスの季節、人気キャラクターをサンタクロースに扮させることはよくあることだ。ところが問屋のお兄さんに尋ねてみると、スヌーピーたちが財神の格好をしているのではなく、これ自体がすでに財神なのだと言う。念のためにもう一度尋ねたが、答えは同じであった。驚くべきことである。外来神だ。スヌーピーもキティも中華の地で神となったか。我らが七福神も元をたどれば外国の神ばかりだが、やはりめまいを感じずにはおれない……。

三元里古廟の西洋人邪鬼といい、このクマのプーさんの財神といい、本来形而上的な概念であるべきところに、即物的なものが何の疑いもなく、そのままの形で入り込んでいるのである。

香港の元朗旧墟地区は古い香港の生活がそのまま生きている場所であり、その一角に北帝廟がある。ここも春

節に備えて、付近の家々の門の両脇にはめでたい対句を書いた春聯が貼られていた。他に幸せを呼ぶお札として「福」を逆さまにしたものとか(「倒」と「到」が同音であることによる)、「大吉」や「招財進宝」を一字にしたものが貼られていた。その中に一枚、奇怪なお札を見つけた(図7)。

これは「福」と「壽(寿)」の文字、そしてミカンの絵から成る合成字である。「橘」(ミカン)は広東語では「吉」に音が近く、春節には戸口を飾るめでたい果物だ。まさに文字と絵とのスリリングな結婚である。ならばこれは絵なのだろうか、それとも漢字なのだろうか? そもそも漢字の成り立ちを考えれば、モノをかたどった字や、既存の字の組み合わせから成る字などがあり、これとてけって不思議なものではない。しかしこういった不思議文字は通常は「呪符」とされ、絵画とは見なされない図像であるとともに、永遠に辞書には載らない漢字なのである。

過剰図像空間、西洋人邪鬼、プーさん神やキティ神、幸せを呼ぶ不思議文字、この象徴性と即物性の織りなすパベルの図像博物館に僕は魅惑され、めまいさせられっぱなしである。そして僕は中国人にとって「図像」とは、という答えの出ない迷宮をさまよい続けるのである。

